ナラティブと自己の発達

企　　画：	田中みどり	（女子栄養大学）
	高橋　登	（大阪教育大学）
	大伴　潔	（東京学芸大学）
	小林　春美	（東京電機大学）
司　　会：	高橋　登	（大阪教育大学）
話題提供者：	岩田美保	（千葉大学教育学部）
：	小松孝至	（大阪教育大学）
	仲野真史	（東京学芸大学附属特別支援学校）
指定討論者：	森岡正芳	（神戸大学大学院）

[企画主旨]

ナラティブは､言語発達研究の分野ではこの 30 年余り認知や記憶との関わりから社会構成的なアプローチに至る様々な角度から多様な研究が積み重ねられてきた。他方、臨床領域でもナラティブ・アプローチが進展し、幅広い分野で研究成果が結実している。本シンポジウムではナラティブと自己の発達に焦点を当て、岩田美保氏には子どもと親しい他者との会話で表現される感情語の研究から、小松孝至氏には小学生の日記の研究から、仲田真史氏には発達障害児への支援研究から、それぞれ話題提供をお願いする。森岡氏による指定討論により、論理科学モードと対比されるナラティブの発達が自己の発達と関わる多面的様相が浮き彫りになることを期する。

「幼児・児童期の自己発達を支えるものとしての感情会話」

岩田　美保（千葉大学教育学部）

幼児・児童期における自他感情理解は良好な社会生活において必要不可欠といえる（Saarni,1999;Dunn & Brophy,2005）。こうした感情理解には、子どもの日常文脈での身近な他者との会話が重要な意味をもつとされる。そもそも子どもが自他感情に言及し始めるのは 2 歳ごろからとされ（Bretherton & Beeghly,1982）、関連した報告もなされてきたが、幼児・児童期を通じてどのようにそうした言及がなされていくかといった点について焦点化された検討は我が国においては多いとはいえず、十分な蓄積がなされないままであるのが現状といえる。仲間同士の関係を本格的に構築し始め、園や学校での生活が日常の大きな位置を占めるようになる幼児・児童期において、子どもが身近な家族や仲間との間で自己や他者の感情についていつどのように言及し、どのような言語的やりとりを行っていくのかという点は同時期の感情理解のみならず、自己発達や、それらを支える社会・言語的環境を考える上で興味深い検討課題であると考えられる。一方、そうした感情会話は同じ身近な相手とのやりとりであっても、やりとりする相手との関係性の質（Dunn,2008）や立場、さらにそこで期待される態度等、その社会的文脈によって大きく影響を受けるといえる。特に教育場面では、ポジティブな感情やそれに関わる経験について話すことは奨励される一方で、ネガティブな感情については、できるだけ早く取り除くべき、望ましくない状態（遠藤,2007）と捉えられることもあり、どのようにそれを調整していくかということに重点が置かれる傾向があるといえる。他方で、家庭での会話は、ポジティブ感情はもとより、そうしたネガティブ感情やそれに関わる経験を正面から扱うことができ、その調整についても学べる機会でもあるが、やりとりされるメンバーによってもその内容は大きく変化する。こうした身近な他者との間でなされる多様な感情会話は、社会生活における自他感情をどのようにとらえ、いつどのようにそれを調整していくのかということについて子どもにさまざまな情報を与えるものといえ、自己発達においても重要な意味をもつと考えらえる。本報告では、こうした観点をもふまえ、筆者がこれまで行ってきた、家庭や園、学校等での日常文脈での幼児・児童の感情会話についての検討内容から、感情語の発達や、子どもが、学校や園の仲間間や家庭での家族メンバー間でポジティブ・ネガティブ感情に関わる言語的やりとりをどのように行っているかといった点を中心に報告を行う予定である。これらをふまえて、幼児期から児童期の自己発達を支えるものとしての身近な他者との間でなされる感情会話の意義について考えたい。

「生活の中の意味構成・自己のあらわれとしてのナラティブと他者」

小松 孝至 （大阪教育大学）

子どもたちの日常生活を考えると，家庭での会話や学校教育において取り組まれる日記指導・スピーチ活動など様々な場面に子どもが自身の経験を物語る活動が見いだせる。発表者はこれまで，こうした場面での表現を子どもの自己のあらわれとして研究してきた（小松，2006; Komatsu, 2012; 小松・紺野，2014 等）。このアプローチは，子どもたちの生活上の文脈や対人関係と切り離さずに語りを捉えうる魅力をもつ一方，（裏返せば）語りの再現性が低く，その解釈や理解も表現がなされる文脈と切り離せない。

このような特徴を積極的にとらえると，主流の発達心理学が暗黙の前提とする「語り」や「自己」の理解を超えざるを得ない。つまり，それらは脱文脈化された問いへの子どもたちへの答えから推測される，内面にある程度安定して存在する（＝ほぼいつでもどこでも再現できる），測定可能な能力・特質ではなく，関係の中で「気まぐれ」にあらわれるものであり，その発達や変容を捉えるとするなら，膨大な資料の中に見え隠れする特徴的な表現をある程度恣意的に拾い上げて論じるようなスタイルをとることになる（少なくとも発表者はそうせざるを得なかった）。また，その評価・解釈が絶対的なものではなく特定の見方をとる研究者によるものであることもより明確になる。

さて，この気まぐれさと関係・状況への依存は，子どもたちがいつどんな時に「語りたく」なるのかという問いと密接な関係にある。そしてそれは，この分野で発達心理学がほぼ無視してきた問いと思われる。本発表では，この点を他者性（otherness）との関連（Komatsu, 2015）で議論したい。Gillespie(2007)は，一般に自分自身への内省が生じる 4 つの理由を挙げたが，それらはいずれも我々が動くことを通して経験する他者（幅広く物質的なものも含んで）との間での異質性の経験を含むと考えられる。このことから，子どもたちの語り（意味構成）を引き起こすのは，彼らの生活に内在する，自分（が経験してきたもの）と異なる誰か・何かとの出会いであるといえるだろう。そして，こうした過程がパートナーとの協同的な相互作用を通して進行する会話に対し，日記では単独で書くことを通し，外在的な自己像が固定されることになる。このこととあいまって，日記の分析では，定型的な意味構成である時系列的な表現と，そこからの変動ないし逸脱としての固有の視点（≒自己）の明確化という対比がよりはっきりと観察され，他者は間接的ではあるがこうした変動をもたらす重要な役割を担っていると思われる。

「子どものナラティブの発達と支援」

仲野真史（東京学芸大学附属特別支援学校）

やまだ(2000)は、物語を「二つ以上の出来事を結びつけて筋立てる行為」と定義し、結ぶことによって経験としての行為が意味づけられると述べている。乳児期から既に、子どもは、通常のよくあることから逸脱する特定の出来事に注目し、大人との相互行為の中でそれらを意味づける営みに参加している。そして、幼児期にはことばで複数の出来事を結びつけ、筋立てることができるようになってくる。最初は語られる出来事数が少ないが、多くの出来事を時間的に結び付けて語るようになり、やがて出来事を因果的に結び付け、心的状態等も交え語るようになる。このようなナラティブの発達は、自伝的記憶や自己理解、他者の心の理解など、様々な発達領域と関連することが指摘されている。

自閉スペクトラム症のある児童では、こうしたナラティブの発達に関して、物語の正確な順序を再生したり、記述的に述べたりすることには問題がなくても、物語に一貫性のあるテーマをもたらす重要な出来事を重みづけた語りが難しい(Bruner & Feldman,1993)、個人的な経験の語りに特に困難を持つ(Losh & Capps,2003)、ナラティブ表出における因果的整合性が弱い(Diehl, Bennetto, & Young,2006)、ナラティブ内の参照関係が曖昧で分かりにくい (Colle et al., 2008; Norbury & Bishop,2003)などの課題が指摘されてきた。一方で、こうした自閉スペクトラム症に帰属されるナラティブの特徴は、ある特定の実験状況の中で語られたモノの特徴に過ぎず、“語る”という相互行為の特徴の中で捉え直す必要があるとの指摘もなされている(浦野・綾屋・青野・喜多・早乙女・陽月・水谷・熊谷,2015)。

一般的に、子どもが自己の経験について語る際、あるいはフィクションの物語を語る際、そこには他者が居て、絵本や写真や経験に関わるモノがある。そうした様々な要素を含む状況の中でナラティブが語られる。ナラティブが語られる場をどのようにデザインしていくことで、ナラティブの発達を支援することができるのか、自閉スペクトラム症のある児童への発達支援の事例を通して考えたい。